という始末だった。それでも、名著『本の神話学』の著者の山口昌男先生や『言語学の散歩』の故・千野栄一先生をはじめ諸先生に励まされ、ネットのサイト〈日本の古本屋〉に一万冊を掲載し、どうにか息を吹き返すことができました。

移転直後にアメリカで起きた同時多発テロは、世界を揺るがす出来事だった。しかし思えば、既に六〇年代にジャック・ケルアックは『路上』のなかで、「俺たちはアラブだ、ニューヨークを爆破しに行くぞ！」と白人の若者に叫ばせている。亀山郁夫先生の新訳『カラマーゾフの兄弟』がベストセラーになったのもうれしい事件だ。文学は凄い！　退官された西永良成先生は、カミュの『異邦人』の新訳にとりかかり、一人称を「俺」にするとおっしゃっていた。すると「ママン」は「おふくろ」にするのだろうか？

現在は未曾有の大不況だといわれている。このような時代に大学生活を送る新入生の皆さまには、どうか萎縮しないで、学部の勉強のかたわら知力を養う読書にも心を向けて、世界へ勇躍されるよう願っています。時には多磨駅前のビルの二階にある当店に来ていただければ幸いです。

（ふかや・さだおみ　にしがはら書店店主）

▼にしがはら書店

当店は、一九七五年に東京都北区西ヶ原で創業し、二〇〇〇年に府中市紅葉丘に移転、西武多摩川線「多磨」駅前のビル二階で営業しています。

品揃は、言語学・語学と文化人類学をメインに、文学・芸術関係が比較的充実しています。昨年はイタリア・東南アジア・イスラム関係の本が数多く入荷しました。学生のみなさん、先生方、どうぞお立ち寄りください。また、退官される先生、卒業される学生の方、蔵書をお売りください。

営業時間　12時〜18時30分（木曜15時まで）、定休日なし
住所　東京都府中市紅葉丘三―四一―一〇　サンライトビル二階
電話　〇四二―三六一―二二七四
Eメール　nisigaharashoten@mtd.biglobe.ne.jp
古本サイト《日本の古本屋》
http://www.kosho.or.jp/servlet/top

古本屋がすすめる本

深谷貞臣

都電荒川線の西ヶ原四丁目の通称〈外大通り〉で古本屋をはじめた七〇年代は、まだ教養が過小評価されない時代だった。学生たちは知識欲旺盛で、卒業生が売りに来る本は、専門書だけでなく優れた教養書が多く、推理小説を読むしか能のない私だったが、なかば自然の成り行きで、人文科学系を柱とする充実した棚構成ができるようになった。

四月になると、意欲的な新入生との会話に刺激され、自分も勉強しなきゃ、と年ごとに気持ちを新たにした。

当時、東外大で講義されていた詩人の安藤次男先生は、眼光鋭い武士のような風貌で、思わず居ずまいを正さずにはいられなかった。先生の著作『定本　松尾芭蕉』と『芭蕉七部集評釈』を読んでからは、すっかり芭蕉のファンになり、俳句に興味を持つようになった。とはいえ、詩心のない身の悲しさ、どんなに頭をひねっても、浮かんでくるのは「カナカナとカナカナ蝉のなく日かな」といったダジャレでしかないけれど、それでも芭蕉の言葉、「高く悟って俗に還る」を座右の銘とし、人物評価の基準とするようになった。

九〇年代の後半には、バブルの崩壊、若者の活字離れ、ブックオフの台頭と、古本業界にも冬の時代が到来した。学生が持ち込む本の中にも『株で儲けるには』といったハウツーものが目につくようになり、芭蕉の句「憂きわれを淋しがらせよ閑古鳥」を口ずさむ毎日だった。そこへ外語大の移転という事態。

幸いというか、倉庫のない身軽さから、意を決して府中に店を移したものの、借りた店舗が二階のため、来客の数が激減、「来てみれば閑古鳥さえ鳴かぬなり」